

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 5 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21320070

研究課題名（和文） ロシアに所蔵される敦煌吐魯番等発見漢文文献の研究

研究課題名（英文） *Research in the Chinese texts which were discovered in Dunhuang, Turfan, etc. and now kept in Russia*

研究代表者

高田 時雄（TAKATA TOKIO）

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：60150249

研究成果の概要（和文）：現在ロシアに所蔵される漢文古写本は、主として 20 世紀の初期、敦煌・吐魯番などの遺跡から発見されたものだが、英仏独などに所蔵される写本と比較して、これまで必ずしも十分な研究が行われてきたとは言い難い。本研究では、サンクト・ペテルブルグのロシア科学アカデミー東洋写本研究所に所蔵される漢文写本を実地調査し、ロシア学者と協力して研究を進めるとともに、現行目録の不備を補い、より完全な目録化に向けた情報の集積を行った。

研究成果の概要（英文）：Chinese old manuscripts now kept in Russia were mainly discovered around the beginning of the 20th century at the archaeological sites such as Dunhuang, Turfan etc., compared with the ones in England, France and Germany, have not yet been pated enough attention so far. In this research program, Chinese manuscripts of the Institute of Oriental Manuscripts, Russian Academy of Sciences, in St. Petersburg, were investigated on-the-spot and studied in cooperation with Russian scholars. Many data were accumulated in order to supplement the existing catalogue and to compile a complete new catalogue.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2010 年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2011 年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2012 年度	3,000,000	900,000	3,900,000
総計	13,500,000	4,050,000	17,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：各国文学・文学論

キーワード：中国史・中国語・写本学・敦煌学

1. 研究開始当初の背景

敦煌吐魯番などから発見された文献の研究は 20 世紀の東洋学、中国学の中心テーマであり、今日でもなお数多くの研究者を引きつける宝庫であるが、それらの材料は主として

スタインやペリオによってもたらされた敦煌写本、ドイツ隊や大谷隊などが持ちかえった吐魯番写本を中心に研究が進められてきた。オルデンブルグが敦煌・吐魯番で獲得した写本はようやく 20 世紀の 60 年代以降しだ

いに世界の研究者の知るところとなり、80年代以降ようやく盛んに利用されるようになってきた。しかしながら基本的な整理のレベルでなお充分な研究が行われているとはいえない。1960年代には基本的な工具書としてメンシコフ等の編になる敦煌写本目録、同じくメンシコフによる『カラホト漢文文献目録』が出現したほか、90年代に入ると『俄蔵敦煌文献』『俄蔵黒水城文献』といった大規模な図録も出版され、研究上の利便性は格段に向上しているが、なお文献同定に多くの問題を残し、写本学的な扱いにも不十分な点が多い。代表者の高田は2003年以来、ロシア所蔵敦煌文献の輪読会（俄蔵会）を組織し、これら文献の精密な解説に従事してきた。高田はまた勤務先の京都大学人文科学研究所において、2006年度から「西陲発現中国中世写本研究」共同研究班を主宰し、毎年研究報告として『敦煌学研究年報』（ISSN1882-1626）を刊行しているが、そこに収録された論文には上記輪読会の成果も少なくない。またこれらの活動にはロシア東洋写本研究のポポヴァ所長も参加し、すでに共同研究の実を挙げている。高田はさらに2003年以来、世界の敦煌学研究者とともに敦煌学国際連絡委員会を組織し、敦煌学の国際的な連携を目的とし『通信』の刊行や、国際学会の開催を行ってきたが、2008年9月にはペテルブルグにおいて敦煌学の国際学会を開催した。同時に2009年7月から9月まで、京都国立博物館においてロシア探検隊所獲写本の展覧会を実現させた。これらはすべて連動して動いており、ロシア所在の敦煌吐魯番等発見写本の研究はまさに新しい段階に入ろうとしていた。

2. 研究の目的

まず敦煌やカラホト発見品など、目録や図録が公刊されて、これまでも利用が可能であった文献について、基礎的な情報の点検を徹底的にやり直すことである。ロシアのコレクション内部での（或いは英仏のコレクション中のものとの）綴合が可能なものは、可能な限りこれを行う。目録が不備なものについては、写本断片の採寸から紙質などを含め、古写本学的な手法で情報を補うつもりである。最終的には上記の目録の「補正」と「補遺」とを作成したいと考えている。その際留意する点は、档案資料などを用いて、ロシア探検隊が文献を獲得した際の状況を洗い出すことである。この側面は一次資料の利用が容易でなかったため、これまでもっとも閑却に付されてきた部分であるが、今回ロシア側と全面的に協力することで、ロシア科学アカデミーの文書館、また東洋写本研究の東洋学者アーカイブを利用することで、大きな前進が見られることを期待している。ロンドンの写本に

つについては大英博物館及びブダペストのアカデミーに残された書簡等の文書による探検隊の行動の解明が進んでおり、パリのペリオ写本についても近年ペリオの探検日誌が整理公刊された。これらはそれぞれ彼らの敦煌探査100周年をきっかけに研究が進展したものであり、本研究もオルデンブルグの100周年に向けた貢献を目指している。さらに望み得べくんば、麻袋文書の公開に向けた予備調査を視野に入れる。袋中の断片の修復整理にはなお時日を要するが、整理されたものから、順次目録化に向けた作業を開始するものとする。

3. 研究の方法

以下のような研究体制と分担によって研究を推進した。上記「研究開始当初の背景」でも触れたように、本研究の母体は高田の組織する「西陲発現中国中世写本研究」班および「俄蔵会」であり、具体的にはその活動と密接に連携して行った。前者は原則として隔週一回の開催であり、後者は毎月一回の頻度で行われた。そのほかにも適宜、講演会や国際シンポジウムなど、本研究独自の集会を組織した。ただし赤尾と落合はそれぞれ本務の条件と勤務地との関連から研究会への参加機会が比較的少なくならざるを得ないため、分担者ではなく、連携研究者としての参加となったが、それぞれ専門とする立場から便宜供与を惜しまれなかったほか、ロシアに於ける調査およびシンポジウムでの研究発表にも参加された。

〔研究代表者〕高田時雄：研究の統括

〔研究分担者〕辻 正博：ロシア所蔵敦煌吐魯番等発見文献の世俗文書を研究する

〔研究分担者〕永田知之 同文献の文学文献の研究

〔研究分担者〕玄 幸子：漢語史的研究

〔連携研究者〕赤尾栄慶：同文献の古写本学的研究

〔連携研究者〕落合俊典：同仏教文献の研究

また海外研究協力者としてイリーナ・ポポヴァ（Irina Popova）ロシア科学アカデミー東洋写本研究員（所長）による特段の協力を得られたことは幸いであった。同氏の助力によりロシア探検隊の档案資料の閲覧が可能となった。本研究には所蔵機関の積極的協力が不可欠であるが、やはり同氏を通じて、東洋写本研究のスタッフとも定期的な連絡を持つことが出来た。

研究を推進する上で中心的役割を果たしたのは上記の研究会等で、図版と目録をつきあわせることによって、写本の内容同定の確認訂正作業を行い、順次データベースに登録し、

メンシコフ目録を補正すべき材料を蓄積した。また新たに得られた知見のうち重要なものについては『敦煌写本研究年報』或いは学会誌等に成果を公開した。図録に載っているが目録に収録していないため、寸法などの情報が欠落しているものは、実物を研究するため現地調査を実施した。また原写本のカラー精細画像のみで十分な場合は、東洋写本研究soを通じてこれらを手に入ることとした。ロシアの敦煌写本はほとんどが小断片であるが、皺を伸ばすのにアイロンをかけたと言われ、紙端の断裂部分などは変なかたちに歪んでいたりとすることがままある。こうした場合は、経験上、写真のみでは積読困難な場合が多く、実際に原写本を見る必要性が起ってくる。場合によっては、こちらの研究の必要に応じて新しい写真を要求することも必要となる(なった)。

4. 研究成果

(1) サンクトペテルブルグのロシア科学アカデミー東洋写本研究soに所蔵される、敦煌・吐魯番・カラホト及びタリム盆地に散在する各遺跡からもたらされた漢文写本について、写本学的な手法をふまえて研究を進め、定期的に開催される研究班や「俄蔵会」を含めた研究集会において研究成果の報告を行った。その上で、少なからぬ数量の論文を国際学会等で発表した(計18件)ほか、『敦煌寫本研究年報』(第4、第5、第6号)をはじめとする雑誌に公刊した(計29件)。「年報」は中国中世写本研究soのウェブサイトですべて公開されている。

(2) ロシア科学アカデミー東洋写本研究soとの協力の下、写本の現地調査を行った。90年代に公刊された図録『俄蔵敦煌文献』全17冊のうち、第11冊以降に収録される写本断片は、刊行時点では文献の同定が行われていなかった。それらについて、可能な限り同定を行うとともに、写本の寸法、用紙の紙質(厚さ、漉き目、色)など、現行目録の補訂に必要な情報を蓄積した。ロシア所蔵の写本は断片が多数を占めるために、その綴合に多く意を用いた。ロシア所蔵の断片の幾つかを綴合する場合もあれば、英仏の写本と綴合し得る場合もあった。ロシア所蔵の敦煌写本には実はオルデンブルグが吐魯番地域からもたらしたものも含まれているために扱いの上で注意が必要だが、一部の写本はベルリンに所蔵されるドイツ隊の所獲品と綴合されるものも見いだされた。これらの実物の調査をふまえた研究成果は、公刊された論文に反映されている。ただし当初企図していた現行目録の補訂版は、ロシア側に新目録編纂計画があるため、当面公刊せず、新目録中に統合することとなった。研究代表者の高田が新目録の出版に協力し、近年中に第1冊が刊行され

ることになっている。

(3) 2010年9月にサンクトペテルブルグのロシア科学アカデミー東洋写本研究soにおいて「涅瓦河邊談敦煌(Talking about Dunhuang on the Riverside of the Neva)」シンポジウムを開催し、高田及び研究分担者、連携研究者全員が参加、論文を発表した。翌年にはその論文集を公刊し、国内外の関係研究者に配布するとともに、ウェブ上でも公開した。この論文集に対するレビューを蘭州大学敦煌学研究所の馮培紅教授によってなされている(近くウェブで公開予定)。それに先だって、2009年7月～9月に京都国立博物館において、特別展覧会「シルクロード、文字を辿って——ロシア探検隊収集の文物」を開催し、図録を公刊した(展覧会と同名、2009年7月14日、A4変型、206頁)。計128点におよぶ東洋写本研究so所蔵の写本を日本に将来し、展覧に供することで、広くこの方面への興味を喚起し得たと信ずる。同時に本研究のスタッフもこの機会に多数の写本を間近に調査観察し得たことは幸いであった。図録の解説には、本研究の分担者をふくめ共同研究soの班員も参画した。

(4) 研究期間を通じ、個別の研究の必要上、東洋写本研究soの好意によって、新たに精細なデジタル・カラー・イメージを一定数入手することができた。これらのデジタル・イメージに対し、さまざまな技術的加工を用いることで、新たに得られた知見も少なくない。このデジタル技術の援用は、今後更に開発すべき側面を有するよう思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計29件)

- ① 玄幸子、『閻羅王授記經』寫經考——天堂へのパスポート、敦煌寫本研究年報、査読有、第7号、2013、203-218
- ② 高田時雄、丁類《五臺山讚》小注、涅瓦河邊談敦煌、査読無、2012、111-122
- ③ 辻正博、Dx09331 唐律写本残片小考、涅瓦河邊談敦煌、査読無、2012、81-90
- ④ 永田知之、Dx10839 《鄭虔殘札》雜考——“搨書”與“真迹”之間、サンクトペテルブルグのロシア科学アカデミー東洋写本研究soに、査読無、2012、65-80
- ⑤ 辻正博、敦煌・トルファン出土唐代法制文献研究の現在、敦煌寫本研究年報、査読有、2012、第6号、249-272
- ⑥ 高田時雄、李盛鐸舊藏寫本《驛程記》初探、敦煌寫本研究年報、査読有、2011、第5号、1-13
- ⑦ 玄幸子、羽039Vを中心とした變文資料の再検討、敦煌寫本研究年報5、査読有、2011、

第5号、81-94

⑧高田時雄、藏經音義の敦煌吐魯番本と高麗藏、敦煌寫本研究年報、査読有、2010、第4号、1-13

⑨永田知之、書儀と詩格——変容する詩文のマニュアルとして、敦煌寫本研究年報、査読有、2010、第4号、119-140

〔学会発表〕(計18件)

①高田時雄、《大唐西域記》の日本古抄本、敦煌研究院專題講演、2012年12月06日、敦煌研究院(中国)

②TAKATA TOKIO, Old Japanese Manuscript Copies of the *Datang Xiyuji*, International Workshop Xuanzang and the "Record of the Wester Regions" -- Constructed Myth and Historical Reality, 2012年06月01日~2012年06月02日, Cardiff University (UK)

③辻正博、唐律流刑の本質——其與恩赦的關係來考察、「中華法系與儒家思想」國際學術研討會議、2013年03月22日、台灣大學(台湾)

④高田時雄、歐洲各國圖書館典藏之東亞漢文文獻、國立成功大學中文系特別講演會、2011年11月17日、台灣國立成功大學(台湾)

⑤高田時雄、敦煌學與語言史、新漢學台北論壇「敦煌研究新視野—以敦煌爲例」、2011年11月18日、台灣國家圖書館(台湾)

⑥玄幸子、《語錄解》反映哪種音系?、第十二屆國際暨第二十九屆全國聲韻學學術研討會、2011年11月18日、台灣國立中央大學(台湾)

⑦辻正博、流人与恩赦——以《唐律》的流刑規定爲中心、唐長孺先生百年誕辰紀念國際學術研討會暨中国唐史学会第11届年会、2011年7月5日、武漢大學(中国)

⑧辻正博、唐律中刑罰的理念與現實——作爲“禮教性刑罰”的流刑、中古時代的禮儀・宗教與制度國際學術研討會、2010年11月6日、復旦大學(中国)

⑨玄幸子、關於 Дх.05463 與 Дх.05155、Second Meeting of the Roundtable "Talking about Dunhuang on the Riverside of the Neva", 2010年9月3日、ロシア科學アカデミー東洋寫本研究所在(ロシア連邦、サンクト・ペテルブルグ)

⑩永田知之、《鄭虔殘札》雜考——“搨書”與“真迹”之間、Second Meeting of the Roundtable "Talking about Dunhuang on the Riverside of the Neva", 2010年9月3日、ロシア科學アカデミー東洋寫本研究所在(ロシア連邦、サンクト・ペテルブルグ)

〔図書〕(計2件)

高田時雄(編)、京都大学人文科学研究所、涅瓦河邊談敦煌(Talking about Dunhuang on

the Riverside of the Neva)、2012、122
辻正博、京都大学學術出版会、唐宋時代刑罰制度の研究、2010、542

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~takata/chuseishahon.html> (中国中世写本研究班)

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~takata/Kyoto/index.html> (俄藏会)

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~takata/Neva.pdf> (涅瓦河邊談敦煌)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高田 時雄 (TAKATA TOKIO)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号: 60150249

(2) 研究分担者

辻 正博 (TSUJI MASAHIRO)

京都大学・人間・環境学研究科・准教授

研究者番号: 30211379

玄 幸子 (GEN YUKIKO)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号: 00282963

永田 知之 (NAGATA TOMOYUKI)

研究者番号: 80402808

京都大学・人文科学研究所・助教

(H21→H23. 11. 2)

(3) 連携研究者

赤尾栄慶 (AKAO EIKEI)

研究者番号: 20175764

京都国立博物館・上席研究員

落合俊典 (OCHIAI TOSHINORI)
国際仏教学大学院大学・教授
研究者番号：10123431